

第1次十字軍時代のユダヤ人迫害

小 崎 潤 一

1

1095年11月27日、Clermont 公会議の最終日、ローマ教皇 Urbanus IIは、東方キリスト教会をムスリムの抑圧から解放し、聖地エルサレムをキリスト教徒の手に奪回するという名目のもとに、十字軍を提唱した。Urbanusのこの呼びかけは、彼自身の精力的な勸説努力もあって、やがて誰も予想しえなかったほどの反響を西ヨーロッパ社会に巻き起こすこととなった。十字軍を組織してオリエントに派遣するという Urbanus の計画の真の狙いがどこにあったのかは、必ずしも明確ではないが、当初彼が構想した遠征軍は恐らく、比較的小規模の騎士を主体とする部隊であったと推測される。そして個々の参加者が長途の遠征に要する莫大な経費を調達し易くするためにも、また安易な志願者を除外するためにも、彼は遠征開始期日を春の収穫を待って、1096年8月15日と指定した¹⁾。ところが Urbanus の予期に反して、彼の呼びかけに真先に反応したのは下級聖職者や農民層であり、しかも彼らは Urbanus のこうした慎重な配慮を無視して、早くも 1096年3月にはフランスを出発してしまった²⁾。

11世紀末の西ヨーロッパでは聖職者と俗人とを問わず、いわゆるグレゴリウス改革の浸透とともに、隠修士運動 (Érémisme) と巡礼熱の著しい高揚が見られた。十字軍自体が一種の巡礼に他ならなかったし、第1次十字軍の勸説に最も貢献した人物は、Urbanus 自身を別とすれば、Pierre d'Amiens と Robert d'Arbrissel であり、そしてこの2人はともに隠修士であった。とりわけ Amiens 出身の Pierre は、その異様な風貌と火を吐くような弁舌によって北フランスの各地で多くの民衆を惹きつけ、1096年3月には 15,000 人から成る大軍を率いて第1次十字軍の先陣を切った³⁾。この Pierre 軍に呼応するかのように、北フランス・フランドル・ロレーヌ・南ドイツから中小領主や下級聖職者に率いられた十字軍部隊が先を争いつつ、ライン川・ネッカー川・ドナウ川に沿って一路 Constantinople を目指して旅立った。ところがこれらの諸部隊は多かれ少なかれ、出征の出鼻でユダヤ人の迫害を行なったのである。

第1次十字軍を契機にして西ヨーロッパで発生した大規模なユダヤ人迫害については、キリスト教徒の手による若干の同時代史料とともに、迫害の模様を詳細に叙述した3篇のヘブライ史料が存在する⁴⁾。本稿ではこれらの史料に依って、迫害の事実が確実視される Rouen とラインラント諸都市の事例を取り上げ、十字軍の発動に伴って惹き起こされたユダヤ人迫害の実態を跡づけていくことにする。

2

我々がエレミヤの予言「ヤコブのために喜び歌い、喜び祝え、諸国民の頭のために叫びをあげよ」云々に従って救済と慰藉を待っていた年、即ち 4856 年、我々の追放より数えて 1028 年、256 太陰周期の第 11 年——この年は反対に悲しみと呻き、嘆きと叫びに変わった。〔聖書の〕警告のすべての中に述べられているあまたの悪がユダヤ民族に加えられた。聖書に挙げられたものも書かれていないものも、我々の上に訪れたのである。

十字軍兵士によってラインラントで行なわれたユダヤ人迫害の有様を仔細に記録したユダヤ人年代記作者 Solomon bar Simson は、その年代記の冒頭でこのように述べている⁵⁾。ユダヤ暦 4856 年は西暦 1096 年に当り、この年はユダヤ人が救世主メシアの降臨を密かに待望していた年であった。言葉の意味を、それを構成するヘブライ文字が表わす数値から解釈する方法 (Guematria) によると、「歌う」を意味するヘブライ語 RANU は 256 に該当した。このような符合から、11 世紀末のユダヤ人の間では、聖書に示されたエレミヤの予言が 1096 年に成就するのではないかという期待があった⁶⁾。しかし現実に彼らの頭上に降ってきたのは、待望久しい彼らの救世主メシアではなく、偶像崇拜の邪教徒の荒れ狂う剣であった。

教皇 Urbanus が Clermont で十字軍を訴えた直後の 1095 年 12 月、ノルマンディーの Rouen で、十字軍を志願する者たちがユダヤ人共同体を襲撃するという事件が発生した。Nogent の Guibert は 1115 年頃に執筆した彼の『自伝』の中でこの事件に触れている。この時、運良く救出されて洗礼を施され、Ely の修道院で修道士として成長したユダヤ人の子供と、彼を保護した Eu 伯の未亡人を Guibert はよく知っていた。

ユダヤ人である 1 人の修道士がこの修道院で暮らしている。エルサレム遠

征の噂がラテン世界全域に鳴り響き始めていた頃、彼は以下のようにしてその迷信的な信仰から解放されたのである。ある日 Rouen で、この遠征のために十字架を持って従軍の誓約をしていた者たちが次のような不平を言いだした。「我々の意図は、遠路はるばる広大な領土を踏み越えて、オリエントへ神の敵どもを征伐しに行くことだ。然るに、ここ我々の眼の前にもユダヤ人があるではないか。これほど神に刃向かった民族はいないんだ。これでは話が逆さまではないか！」 こう言いながら彼らは武器を取ってユダヤ人を狩り集めにかかり、暴力的にあるいは奸策を弄して——私は正確には知らないが——、とある教会の中に彼らを詰め込み、そしてそこから引きずり出して、性別・年齢に関係なく無差別に剣を振り下ろした。しかしキリスト教信仰に帰依することを同意した者は虐殺の脅威を免れている。ある貴人が1人の幼い子供を見つけ、その子に憐れみを感じて抱き上げ、自分の母親にその子を託したのは、この殺戮の最中であつた⁷⁾。

Guibert のこの記述には、第1次十字軍時代のユダヤ人迫害の形態が典型的に示されている。(1) ユダヤ教の象徴であるシナゴグの襲撃・破壊 (Guibert がとある教会と言っているのは明らかにユダヤ教会のことである) (2) ユダヤ人にキリスト教への改宗を迫り、同意して洗礼を受けた者は助命し、拒絶した者は殺害するという、改宗か死かの二者択一 (3) 迫害の論理として、遙かオリエントのムスリムが神の敵と見做されるのであれば、ムスリムにも増して神の敵である眼前のユダヤ人が何故放置されるのかという疑問。そしてこれらの諸点は、やがてラインラントで発生する大迫害の中でより一層集中的に浮き出てくることになる。

Rouen 以外に、フランスの他の地域でも同様の襲撃が行なわれたのかどうかについては確認できない。ただ間接的ながら、南フランスの Monieux で 1096 年に、ユダヤ人共同体が反ユダヤ暴動の犠牲となったことが知られている⁸⁾。また早々に遠征を開始した隠修士 Pierre は、ユダヤ人に対する攻撃的言辞を吐かないことへの代償として、北フランスの共同体から1通の書状を獲得していたと言われる。その内容は、行軍の途上に存在するユダヤ人諸共同体に対して、Pierre 軍に糧食の提供を要請したものであつた⁹⁾。Pierre がこうした書状を得るに際しては、当然北フランスの共同体に対して力を背景にした威嚇のあつたことが推察される。この書状が功を奏したのかどうかは分からないが、とにかく、1096年8月に Constantinople へ到着するまでの間に、Pierre の大軍がユダヤ人を迫

害した形跡は見当らない。

一方 Rouen の事件について、北フランスの幾つかの共同体は、ライン川流域の全共同体に通報し、十字軍部隊の通過に伴ってラインラントでも同様の事態の生じる危険性を知らせた。これに対して Mainz のユダヤ人は、Rouen の犠牲者に祈りと断食を以って哀悼を捧げたのみで、自らを防衛する対策を何ら講じなかった¹⁰⁾。その理由は恐らく、十字軍の呼びかけがドイツではフランスほどの熱狂を惹き起こさなかったからでもあろうし、またそれほどにラインラントのユダヤ人諸共同体は繁栄と安定を誇り、皇帝や司教による保護を確信していたからでもあろう。バス-ロレーヌ公 Godefroi de Bouillon が十字軍に出征するに当って、ユダヤ人を根絶やしにする誓いを立てたとの風評が流れるに及んで、Mainz のユダヤ人指導者 Rabbi Kalonymos は、当時北イタリアに滞在していた皇帝 Heinrich IV のもとへ使者を送って保護を訴えた。皇帝はこれに応じて、Godefroi を含めた彼の全封臣にユダヤ人の権利と生命の保護を命じた。Godefroi は、ユダヤ人に対しいかなる危害も加える意図はなく、皇帝の命令を尊重することを確約した¹¹⁾。ところが隠修士 Pierre や文無し Gautier の軍が 1096 年 4 月にラインラントを通過するにつれて、この地方でも十字軍の気運が急速に高まり、それとともに 5 月初旬から 7 月にかけて、ラインラント諸都市のユダヤ人共同体は軒並み反ユダヤ的感情の激発に曝されることとなった。

まず 5 月 3 日、Speyer に集結していた南ドイツの反皇帝派領主 Leiningen 伯 Emicho の部隊は、当日がユダヤ人の安息日(サバト)であることから、大勢のユダヤ人が集まる礼拝時にシナゴグを急襲した。しかし予め危険を察知したユダヤ人は礼拝を早目に切り上げていたため、部隊が襲った時シナゴグには誰もいなかった。その後兵士たちは当市の 11 人のユダヤ人を殺害した。騒ぎを聞いた Speyer 司教 Johan は武装兵を引き連れ、暴徒を捕えてその腕を切り落とすといった断固たる態度で臨み、騒動を制圧した¹²⁾。ちなみに Johan は叙任権闘争の中で皇帝派に属する司教であった。

続いて Worms へ移動した十字軍部隊は、5 月 18 日と 25 日の 2 度に亘り、Worms 市内を舞台に大惨劇を繰り広げた。ここでも Worms 大司教 Adalbert がユダヤ人の一集団を大司教館の中に匿うなどしたものの、十字軍部隊の圧力に抗しきれず、彼らにキリスト教への改宗を勧めた。やがて近在の農民をも混じえた十字軍兵士が大司教館に乱入し、中にいたユダヤ人を殺害し、市内で殺戮を恣にした。Salomon bar Simson によると、Worms における 2 日間の犠牲者は 800 人を数えた¹³⁾。

Emicho はさらにドイツのユダヤ人社会の中心地であった Mainz へ向かい、ここでフランス・イングランド・フランドル・ロレーヌ・シュヴァーベンから来た諸部隊と合流した。この中には、既にスペインでムスリムと闘った経歴を持つ Melun 副伯 Guillaume le Charpentier, イール・ド・フランスの掠奪領主として Nogent の Guibert や Saint-Denis の Suger の著述にしばしば登場する Coucy 領主 Thomas de Marle, あるいは Drogo de Nesle や Clarendon de Vendeuil といった、いずれも十字軍史に名を留める有力領主がいた¹⁴⁾。既に Speyer と Worms での惨状を聞いていた共同体の有力者たちは、Mainz の大司教と世俗領主、並びに彼らの家臣や従僕に至るまで、約 400 ゼクキム (zekukim) の銀¹⁵⁾を贈って買収した。大司教たちはユダヤ人の保護を約束したものの、Emicho の Mainz 到着に呼応して市内で反ユダヤ暴動が発生し、その際 1 人のキリスト教徒が殺されたことから、暴動は一層激化するところとなった。ついに 5 月 27 日、反ユダヤ的な一部市民は大司教 Ruthard の命令に逆らって、Emicho に対して市門を開いた。大司教は多くのユダヤ人を大司教館に収容し、共同体側と Emicho との交渉の仲介の労を取るなどしたが、攻撃を阻止することはできなかった¹⁶⁾。ユダヤ人たちも闘うことのできる者は武器を取って抵抗を試みたものの、数の上で圧倒的に劣勢であることに加えて、神の怒りを鎮めるための数日間の断食と極度の恐怖からくる衰弱もあって、到底十字軍兵士の敵とはなり得なかった。しかも当初彼らを警護していた大司教の家臣たちは真先に逃げ出し、大司教自身も身の危険を感じて教会から逃走した。結局、5 月 27 日から 29 日にかけて 900~1,300 人のユダヤ人が犠牲となり、Mainz の共同体は壊滅した¹⁷⁾。

Emicho はこの時 Mainz から東方へ向けて進発したが、彼の部隊の一部はさらに Köln へと北上し、モーゼル溪谷からユダヤ人を一掃すると唱えて、6 月初めに Trier と Metz でも迫害を行なった¹⁸⁾。Köln 大司教は逸早く市内のユダヤ人を近在の各所に分散疎開させて難を逃れさせたものの、やがて迫害の手は 6 月下旬から 7 月初旬にかけて、Köln から避難したユダヤ人の隠れ住む Neuss, Wevelinghofen, Altenahr, Eller, Xanten, Mörs へと伸びていった¹⁹⁾。一方これより先の 5 月 23 日には、いかなる部隊か特定できないが、Ratisbon (Regensburg) でユダヤ人のほとんど全員をまとめてドナウ川に投げ込み、司祭が水面に十字の印を切って洗礼を強制した²⁰⁾。さらに 5 月 30 日には、恐らく、Folkmar という名の司祭に率いられたザクセン人とボヘミア人の一隊が Praha のユダヤ人を襲撃した²¹⁾。

Toulouse 伯 Raymond de Saint-Gilles と Le Puy 司教 Adhémar を総司令官

とする正規の十字軍の出征に先がけて、民衆（農民）十字軍と総称される多数の部隊がエルサレム行の旅に上った。隠修士 Pierre 軍のように、ともかくも小アジアに渡りトルコ軍と戦闘を交えたものもあるが、中には糧食の確保に難渋してハンガリーやブルガリアで住民を掠奪したり、現地権力と衝突したりして、途中で瓦解四散する部隊も少なくなかった。司祭 Folkmar の部隊はハンガリーの Nitra で、同じく司祭 Gottschalk の隊は Székesfehérvár (Stuhlweissenburg) で全滅、そして Emicho 軍はハンガリー領内の通過を拒絶され、Moson (Wieselburg) で壊滅・敗走した²²⁾。

3

ローマ教会の公式見解では、ユダヤ人（教徒）は故なく殺されることは勿論、意に反して強制的にキリスト教に改宗させられるべきものでもなかった。Gregorius 大教皇以来、1215年の第4 Lateran 公会議に至るまで、この方針に基本的な変更はなかった。キリスト教社会におけるユダヤ人の存在自体が、キリスト教信仰の正しさを証明する「信仰の証」であった。十字軍が現実化する遙か以前から、スペインではフランスの騎士とムスリム軍との間で小規模な戦闘が繰り返されていた。恐らくその際にも、南西フランスやスペインでユダヤ人が攻撃の対象になったと考えられる。例えば1063年の Barbastro 遠征の折、時の教皇 Alexander II はスペインの全司教に書簡を送り、彼らが遠征軍の攻撃からユダヤ人を守ったことに賛意を表明するとともに、改めてユダヤ人の迫害を禁じている。

先般諸卿から私が受けた報告、即ち諸卿が諸卿のもとに居住するユダヤ人を、サラセン人に対抗するためスペインに遠征した者たちによって殺害されることのないよう、いかにして保護したかという話は我々にとって同慶の至りである。恐らくは神の愛が救済に向けて予定していた者たちを、彼らは愚かな無知により、あるいは恐らく盲目的な強欲によって殺害して猛り狂おうと言ひ張った。しかし聖グレゴリウスが何人に対しても彼らを抹殺することを禁じた如く、神の憐れみによって保護されている彼らを消し去ろうと唱えることは非道である。……確かにユダヤ人とサラセン人の事情は異なっている。キリスト教徒を迫害し、諸都市や彼らの家から追い出している輩は、当然闘われなければならない。しかしどこにあらうと、彼ら〔ユダヤ人〕は〔我々に〕仕える覚悟でいる。いかなる司教に対しても

彼らのシナゴグを破壊しようとすることを禁じる²³⁾。

Alexander のこの書簡は、第1次十字軍時代の最も権威ある教会法学者 Yves de Chartres の『法令集』にも採録されており²⁴⁾、従ってユダヤ人に対するローマ教会の見解は一貫していた。事実、Praha で迫害があった時、司教 Cosmas は強制改宗が教会法に反すると見て、徒労に終わったものの、正義への情熱に駆られてユダヤ人の強制改宗を禁じる努力をした²⁵⁾。年代記作者 Aachen の Albert もラインラントでの迫害を記録する中で、「神は正しい裁き手であり、何人も意に反して、また強制的にカトリック信仰の軛に繋がれてはならないと命じている」と、強制改宗の不当性を冷静に説いている²⁶⁾。

しかしながら Alexander II の書簡からも窺えるように、神学や教義にはおよそ無縁の俗人大衆の間では、キリスト教信仰の敵としてユダヤ人（教徒）とムスリムを、あるいはユダヤ人と異端を区別して考えること自体が既にむづかしくなっていた。Nogent の Guibert が伝える Rouen での迫害と全く同じ理屈をラインラントでも十字軍兵士が唱えている。ユダヤ人年代記作者 Solomon bar Simson によると、

我々の眼の前にかの人〔キリスト〕を敬わない民族がいるのに——実際、彼らの先祖はあの方を十字架に懸けた連中だ——、我々はなぜエルサレムの辺りに住んでいるイシマエリトとの戦争に行かねばならないのか？なぜ我々は彼らを生かし、彼らの居住を大目に見ているのか？まず初めに我々の剣を彼らに見舞い、然る後に我々のさすらいの道行きを続けようではないか²⁷⁾。

イエス＝キリスト処刑の責任をユダヤ人に帰す考えは、『ヨハネ福音書』に露骨に表わされているように、既にキリスト教成立当初から存在し、キリスト教の普及拡大の過程で、キリスト殺しとしてのユダヤ人観はキリスト教信者の心に抜き難く浸透したに違いない。そして一旦信仰に関わる深刻な問題状況が生じた時には、キリスト殺害者の子孫であるユダヤ人に対して報復を加えようとする感情も容易に生み出されるであろう。1009年にエルサレムの聖墳墓教会がファーチマ朝カリフ Al-Hakim によって破壊された折、ヨーロッパではこれをユダヤ人の陰謀によるものとする風説が流布し、若干の場所では迫害も行なわれた可能性がある²⁸⁾。十字軍は紛れもなく、キリスト教信仰を擁護するべく、そ

の敵と闘うことを目的として教会によって宣言された事業であった。450年前ムスリムによって奪われた聖地を奪回するため、キリスト教徒がオリエントに遠征しムスリムと闘うことが正当であり、かつ今求められているのであれば、1,000年前にイエス＝キリストを十字架に懸けて殺したと信じられるユダヤ人の子孫に復讐することがなぜ許されないのかという疑問は、一般の敬虔なキリスト教徒にとって極めて素朴な感情であったろう。Bar Simson は、ユダヤ人に対するキリスト教徒の報復願望こそが十字軍の目的であったと見ている。彼の伝えるところによると、Mainz での迫害の際、十字軍兵士がユダヤ人に向かって次のように叫んだ。

貴様らは我々の崇拝の対象を木に懸けて殺した連中の子供だ。その人〔キリスト〕が自らこう言われたんだ、「私の子らがやっ来て私の血に復讐する日が訪れるであろう」と。我々はその人の子である。それ故、貴様らがその人に背き信じない輩であるからには、その人の復讐をするのは我々の義務だ²⁹⁾。」

ここにはキリスト殺害に対する報復の観念と同時に、キリスト自身が生前それを望んでいたとの俗信が明瞭に表わされている。Mainz では十字軍兵士たちが口々に「キリストの名のもとに」、「キリストの流した血の復讐」を叫びながらユダヤ人に襲いかかった³⁰⁾。Aachen の Albert によると、十字軍兵士の中にはユダヤ人を殺すことで贖宥が得られると信じ込んでいる者もいた³¹⁾。Dithmar なる伯は、ユダヤ人を1人殺すまではドイツを去らないと公言した³²⁾。

このような狂信的雰囲気掻き立てられる中で、世界の終末の近いことを信じる多数の民衆が、二度と再びイスラエルの名が思い起こされることのないように、キリスト教世界からユダヤ人（教徒）を一掃することによって、エルサレムへの道を掃き清めようとした。そもそも西ヨーロッパのキリスト教徒をエルサレム遠征に駆り立てた衝動も、時の終わりが差し迫り世界が根底から変わろうとしているとの終末観に基づくところが大きく、従って『ヨハネ黙示録』に予言されている「新しいエルサレム」を建設するため、異教徒を根絶しなければならないという信念であった。教皇 Urbanus 自身、Clermont でこのような観点を訴えたことも考えられるし、その後各地で十字軍を説いた説教師たちは、間違いなく甚だ扇動的な表現で、悔悛の旅としての十字軍を人々の心に植え付けたのであろう。しかも Urbanus は参加者に全贖宥を約束したのである³³⁾。

ラインラントにおける最大の迫害者であった Leiningen 伯 Emicho は、南イタリアでキリストから直接王冠を授かるであろう、との啓示を使徒より得たと吹聴していた³⁴⁾。確かに Emicho は、自らを終末の直前に現われるとされた最後の皇帝に擬えていた。彼自身も、また彼に率いられた兵士たちも、ユダヤ人を改宗させてキリスト教世界に引き入れることによって、終末の到来を促進しているものと考えていたのかも知れない。なぜなら、世界の終末に当ってユダヤ人はキリスト教に改宗するであろうとの Gregorius 大教皇の教えは、11世紀末にも依然として変わらないローマ教会の公式教義であったからである³⁵⁾。

4

ユダヤ人は様々な身分的制約を受けながらも、スペインを除くヨーロッパのキリスト教世界に居住を許された唯一の異教徒であった。彼らは紀元千年紀を通じてローマ帝国領内を漸次北上し、各地に共同体を形成していった。特に9世紀以降、カロリング朝によるユダヤ人保護のもとに、ラインラントには多数のユダヤ人が集住した。言語を初めとする伝統・文化の共通性、そして何よりも強固な宗教的一体感、商業交易の極めて希薄な時代にあつて、半ば必然的に彼らを貴重な国際的遠隔地貿易業者とした。同時にそのことは、キリスト教世界内における彼らの宗教的・社会的周縁性ととも、これまた半ば必然的に彼らを聖俗の権力者たちに直接従属する被保護民とした³⁶⁾。1020年代、「非常に豊か」であった都市 Sens の伯 Raynaud は、ユダヤ人に対する格別の愛顧の故に「ユダヤ人の王」と揶揄されたと言われるし、Speyer 司教 Rüdiger は、1084年、自分の町の商業活動を促進するため、わざわざ Mainz のユダヤ人に特権を与えて Speyer に呼び寄せたほどであった³⁷⁾。10～11世紀に見られる諸都市の著しい成長の裏には、ユダヤ人の活動が少なからず寄与していた。もとより彼らの活動領域は商業交易や徴税請負に限られていたわけではなく、Rouen のユダヤ人 Mar Reuben の例に明らかな如く、世襲的に土地を保有して農業経営を行ない、あるいは染色業を営む者もいた³⁸⁾。彼らは実にヨーロッパにおける商業的先駆者であったばかりでなく、若干の農業技術の分野においても先導者の役割を果たしたのであった。こうしてラインラントの Mainz, Köln, ノルマンディーの Rouen, シャンパーニュの Troyes, Reims などのユダヤ人共同体は11世紀のほぼ全期間に亘って繁栄を誇り、Mainz の Gershom ben Judah (ca. 960-1028) や Troyes の Solomon ben Isaac (Rashi, ca. 1040-1105) は律法解釈の最高権威として、ヨーロッパのユダヤ人社会であまねく尊重された。しかし一方、

土地所有を政治的・社会的権力の根幹とする封建体制が確立する中で、異教徒ユダヤ人は次第に土地から排除され、各種の営業特権を奪われていく情勢が進行した。勢い彼らは、キリスト教徒の忌避する（しかし現実には必要不可欠な）金融業などの特定業種に限定されざるを得なくなった。

ところで A. Murray が言うように、商業の活性化とそれがもたらす貨幣流通の増大とともに、ユダヤ人はヨーロッパ最初の「成金」(nouveaux riches) となったのである³⁹⁾。そしてそのようなユダヤ人「成金」に対するキリスト教徒側の反感は、ユダヤ人と同じく商業交易に従事して富を成しつつあった商人層(都市民)よりも、むしろ旧来の土地領主や貨幣に縁の薄い貧民層から生じたことも、1096年の迫害に照らして見れば明らかである。Mainz や Köln あるいは Praha においても、ユダヤ人商人とは商売敵であるはずの都市民の多くは、彼らを自宅に匿うなどして保護する立場を取った。

十字軍遠征に要する費用は原則として自弁であった。数カ年に及ぶ出征経費を調達することは、個々の参加者にとって並大抵のことではなく、それぞれ土地を抵当に入れたり宝石を売却したり、考えられるあらゆる手段を用いて資金を捻出した⁴⁰⁾。当然、資金調達をユダヤ人の手に頼らざるを得ない者も少なからずいたと思われる。そのような場合、ユダヤ人に対する感情の捩れは一層増幅されたであろう。50年後に第2次十字軍が提起される時には、キリスト教徒から金を巻き上げているユダヤ人の財産を没収して、これを十字軍資金に充てようとの議論が声高に唱えられるようになる。しかもこのような主張を説いたのは、シトー会修道士 Rudulf のような狂信的扇動家のみに留まらず、12世紀前半の修道院的知性を代表する人物の一人、Cluny 修道院長 Pierre le Vénérable さえもが、ユダヤ人の放逐と財産没収を国王 Louis VII に献策するに至る⁴¹⁾。

11世紀末に始まった十字軍は、その後約200年の間ヨーロッパ社会を間歇的に揺り動かし、その理念は晩年の Columbus をも捉えて離さなかったほど、キリスト教徒の心に深く浸透した。しかしながら、十字軍がヨーロッパにもたらした積極的価値としては、極言すれば、唯一アプリコット（あんず）のみであったと言われるように、実際にはヨーロッパはこれによって余りに多くのものを失った反面、得たものは甚だ少なかった⁴²⁾。数次に及ぶ十字軍は、ヨーロッパ人に対する修復不能とも言える不信と憎悪の念をムスリムとビザンツの両世界に植え付けた結果、キリスト教世界とムスリム世界、ラテン・キリスト教会とビザンツ教会の間には、埋めることのできない深い断層が生じた。そして同時に救済の旅としての十字軍は、ユダヤ人に対するヨーロッパ・キリスト教徒の

度し難い憎悪と嫉妬と恐怖の感情を煽り立てる作用を果たし、やがて13世紀以降ともなると、ユダヤ人の存在自体がヨーロッパの多くの地域で拒絶されていくのである。1096年の迫害は、ユダヤ人がより一層悪い状態へと転落していく最初の一步であった。

註

- 1) H. Hagenmeyer, *Die Kreuzzugsbriefe aus den Jahren 1088-1100*, Innsbruck, 1901, p. 137. フランスでは数年来、早魃による穀物不作が続いていたが、1096年の春は湿潤な天候に幸いされて大豊作となった。Foucher de Chartres, *Historia Iherosolymitana, Recueil des historiens des croisades. Historiens occidentaux* [RHC Occ.], t. III, Paris, 1866, p. 328; Guibert de Nogent, *Gesta Dei per Francos*, RHC Occ., t. IV, Paris, 1879, p. 141. cf. J. Riley-Smith, *The First Crusade and the Idea of Crusading*, London, 1986, p. 44.
- 2) H. Hagenmeyer, *Chronologie de la première croisade 1094-1100*, Paris, 1902, pp. 14-15.
- 3) Clermont 公会議の13年後に十字軍記を著わした年代記作者 Nogent の Guibert は、隠修士 Pierre が説教するところを目撃している。*Gesta Dei per Francos*, p. 142. なお隠修士 Pierre については、H. Hagenmeyer, *Le Vrai et le faux sur Pierre l'hermite*, traduit par F. Raynaud, Paris, 1883; Y. LeFebvre, *Pierre l'ermite et la croisade*, Amiens, 1946. Robert d'Arbrissel については、J. Dalarun, *L'impossible sainteté. La vie retrouvée de Robert d'Arbrissel*, Paris, 1985; do., *Robert d'Arbrissel. Fondateur de Fontevaux*, Paris, 1986.
- 4) *The Chronicle of Solomon bar Simson; The Chronicle of Rabbi Eliezer bar Nathan; The Narrative of the Old Persecutions (Mainz Anonymous)* の3篇で、いずれも *The Jews and the Crusaders. The Hebrew Chronicles of the First and Second Crusades*, transl. and ed. by S. Eidelberg, Madison, 1977 に英訳・所収されている。これら3篇の年代記は12世紀中頃ないしそれ以降に書かれたものであるが、内容や表現に多くの酷似が見られることから、これらよりも先に(恐らく迫害直後に)書かれた資料を素材にして構成されたと考えられる。3篇のうち最も詳しい迫害記録を残した Solomon bar Simson については、Salomon b. Simeon, Salomon b. Samson, Shelomo b. Shimshon 等の表記もあるが、ここでは Eidelberg に従った。
- 5) Eidelberg, *op. cit.*, p. 21.
- 6) バルカン地方のユダヤ人共同体では、メシアの降臨に立ち会うため家財を処分して出かける準備をしている、との情報がフランスに伝わり、真偽を確認するためフランスのユダヤ人は Salonika の共同体に問い合わせの手紙を出している。

- J. Prawer, *Histoire du royaume latin de Jérusalem*, t. I, Paris, 1975, p. 525 ; E. Gourevitch, « Juifs d'Europe, premières victimes », *Notre Histoire*, n° 20, 1986, p. 26 ; P. Girard, *Pour le meilleur et pour le pire*, Paris, 1986, p. 69.
- 7) Guibert de Nogent, *De vita sua*, éd. E.-R. Labande, Paris, 1981, pp. 246-248.
- 8) Gourevitch, *op. cit.*, p. 26 ; Girard, *op. cit.*, p. 70. 極めて莫然とした表現ではあるが、次の史料は複数の都市で迫害のあったことを推測させる。「Et primo Judaeos in urbibus, in quibus erant ingressi, ad credendum compellunt ; nolentes ab urbibus eliminant, trucidant, bonis temporalibus privant, quorum quidam se perimunt, alii, ad tempus se credere simulantes, ad judaismum postea relabuntur.」Notitiae duae Lemovicenses de praedicatione crucis in Aquitania, *RHC Occ.*, t. V, Paris, 1895, p. 351.
- 9) Bar Simson, *Chronicle*, ed. Eidelberg, p. 62.
- 10) *Mainz Anonymous*, ed. Eidelberg, pp. 99-100.
- 11) Bar Simson, pp. 24-25. cf. P. Aubé, *Godefroy de Bouillon*, Paris, 1985, pp. 144-145.
- 12) Bar Simson, p. 22 ; Eliezer bar Nathan, *Chronicle*, ed. Eidelberg, pp. 80-81 ; *Mainz Anonymous*, pp. 100-101. vid. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 19-20.
- 13) Bar Simson, p. 23 ; Bar Nathan, pp. 81-82 ; *Mainz Anonymous*, pp. 101-105. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 20-21.
- 14) Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, *RHC Occ.*, t. IV, pp. 293-294. cf. D. Barthélemy, *Les deux ages de la seigneurie banale*, Paris, 1984, p. 88 ; Riley-Smith, *op. cit.*, pp. 51-52, 72, 77. J. Prawerは、SpeyerとWormsでの迫害の主謀者をGuillaume le Charpentierとしている。(Prawer, *op. cit.*, p. 187.) しかしSpeyerの事件を述べる際にEmichoの名を明記している *Mainz Anonymous* や、GuillaumeはMainzでEmichoと合流したとするAachenのAlbertの記述からして、SpeyerとWormsにおける迫害もEmichoの部隊を中心に行なわれたものと考えるのが妥当であろう。v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 19-21.
- 15) 1 zakukは銀12 ozに相当。従って400 zekukimは4,800 oz (148.8 kg)になる。Eidelberg, *op. cit.*, p. 147, n. 39.
- 16) 共同体側は大司教を通じてEmichoに7ポンドの金を贈るとともに、隠修士Pierreが持参していたのと同様の糧食提供依頼状を与えた。Bar Simson, p. 29.
- 17) Bar Simson, pp. 23-49 ; Bar Nathan, pp. 82-85 ; *Mainz Anonymous*, pp. 105-115 ; Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, p. 292. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, p. 23.
- 18) Trier : Bar Simson, pp. 62-67 ; Bar Nathan, p. 92. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 25-26. Metz : Bar Simson, p. 67 ; Bar Nathan, p. 92. v.

- Hagenmeyer, *Chronologie*, p. 18.
- 19) Bar Simson, pp. 49-61; Bar Nathan, pp. 85-92; Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, p. 292. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 24-29.
- 20) Bar Simson, p. 67. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 21-22. S. Runcimanはこれを司祭Gottschalkの一隊の仕業としているが, J. Riley-Smithは隠修士 Pierre軍による可能性を指摘している。Runciman, *A. History of the Crusades*, Vol. I, Cambridge, 1951, p. 140; Riley-Smith, *op. cit.*, p. 50, n. 89.
- 21) *Annales Pragenses, Monumenta Germaniae Historica, Scriptores (MGH. SS.)*, t. III, p. 120; Cosmas Pragensis, *Chronicon, MGH. SS.*, t. VII, p. 103. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, p. 25.
- 22) Ekkehard von Aura, *Hierosolymita, RHC Occ.*, t. V, pp. 20-21; Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, pp. 290-291, 295. v. Hagenmeyer, *Chronologie*, pp. 29, 34. cf. Runciman, *op. cit.*, pp. 140-141.
- 23) *Alexandri II epistola ad omnes episcopos Hispaniae*, Migne, *Patrologia latina (PL)*, t. CXLVI, cols. 1386-1387.
- 24) *Decretum*, Migne, *PL.*, t. CLXI, cols. 824-825, cf. J. Brundage, *Medieval Canon Law and the Crusader*, Madison, 1969, p. 21.
- 25) Cosmas Pragensis, *Chronicon*, p. 103. « Quidam ex eis per hanc nostram terram dum transirent, permittente Deo, inruerunt super Judaeos et eos invitos baptizabant, contradicentes vero trucidabant. Videns autem Cosmas episcopus contra statuta canonum haec ita fieri, zelo justitiae ductus frustra temptavit prohibere ne eos invitos baptizarent, qui non habuit qui eum adjuvarent. »
- 26) Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, p. 295. « cum justus judex Deus sit, et neminem invitum aut coactum ad jugum fidei catholicae jubeat venire. »
- 27) Bar Simson, p. 26.
- 28) Raoul Glaber, *Historiae*, dans *L'an mille*, éd et trad. par E. Pognon, Paris, 1947, pp. 95-97; *Annales Quedlinburgenses, MGH. SS.*, t. III, p. 81 (a. 1012). cf. K. Stow, *The "1007 Anonymous" and Papal Sovereignty: Jewish Perceptions of the Papacy and Papal Policy in the High Middle Ages*, Cincinnati, 1984, pp. 27-28.
- 29) Bar Simson, p. 25.
- 30) Bar Simson, pp. 25, 30, 36, 39; *Mainz Anonymous*, p. 100.
- 31) Albert von Aachen, *Historia Hierosolymitana*, p. 293.
- 32) *Mainz Anonymous*, p. 100.
- 33) Robert le Moine, *Historia Iherosolimitana, RHC Occ.*, t. III, pp. 729-730;

- Guibert de Nogent, *Gesta Dei per Francos*, p. 138 ; Orderic Vitalis, *Historia Ecclesiastica*, ed. M. Chibnall, Vol. V, Oxford, 1975, pp. 14-16. cf. P. Rousset, *Les origines et les caractères de la première Croisade*, Genève, 1945, pp. 68 ff ; P. Alphanféry et A. Dupront, *La chrétienté et l'idée de croisade*, Paris, 1954 ; Riley-Smith, *op. cit.*, ch. I, esp. p. 21.
- 34) Bar Simson, p. 28.
- 35) S. Gregorius, *Moralia*, Migne, *PL.*, t. LXXVI, col. 763. « Conversio Judaeorum in fine mundi praenuntiata. » ところで、十字軍をきっかけにして発生したユダヤ人の殺戮や強制改宗について、教皇 Urbanus II がどのような態度を示したのか、実は皆目分からない。これらの事件に関する情報は、当時まだ南フランスを巡歴していた Urbanus のもとへも達したはずである。翌 1097 年、皇帝 Heinrich IV がドイツにおける強制改宗の無効を宣し、キリスト教に改宗させられたユダヤ人のユダヤ教への復帰を認めたことに対して、Urbanus は対立教皇 Clemens III とともに激しく抗議した。Ekkehard von Aura, *Chronicon universale*, *MGH. SS.*, t. VI, p. 208, cf. Stow *op. cit.*, pp. 17-18.
- 36) 中世ヨーロッパにおけるユダヤ人の概観については、*Dictionary of the Middle Ages*, ed. J. R. Strayer, Vol. VII, New York, 1986, pp. 63-97.
- 37) Raoul Glaber, *Historiae*, pp. 93-94 ; E. Ennen, *The Medieval Town*, transl. by N. Fryde, Amsterdam, 1979, pp. 197 ff.
- 38) P. Girard, *op. cit.*, pp. 61-63.
- 39) A. Murray, *Reason and Society in the Middle Ages*, Oxford, 1978. p. 69.
- 40) Riley-Smith, *op. cit.*, pp. 43 ff. には資金調達のための具体的事例が列挙されている。
- 41) *Epistola Petri ad Ludovicum Francorum regem*, *The Letters of Peter the Venerable*, ed. G. Constable, Vol. I, Cambridge (Mas.), 1967, pp. 327-330.
- 42) A. Vauchez, « Peu de profits, beaucoup de pertes », *Notre Histoire*, n° 20, 1986, pp. 58-63.

(本稿は昭和 62 年度文部省科学研究費一般研究 C による研究成果の一部である。)

(昭和 62 年 10 月 15 日原稿受付)